

物語作品の出現と物語表現の完成

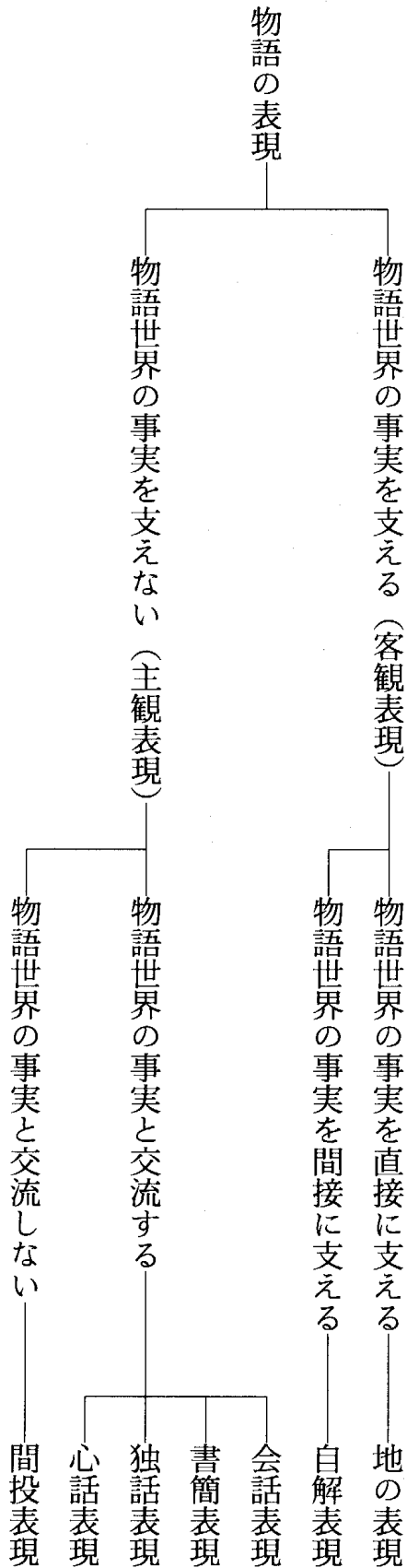
— 竹取物語の表現史的位置づけ —

長 沼 英 二

物語の表現 本稿は、平安時代の物語作品を形成する表現に七種の表現を措定し、それに竹取物語を当てはめ、竹取物語を形成する表現の種類を明確にして、竹取物語の表現史的位置づけを企図するものである。

さて、平安時代の物語作品の表現の体系を資料一のように考える。

〔資料一〕 物語表現の体系



これは、物語世界の事実との関係を基準として、物語表現の体系を考えたものである。物語世界の事実との関係を分類の基準とするのは、物語作品がその作品世界をどのように構築するかを、作品本文に即応して、機能の観点から説明したいと考えるからである。

まず、物語作品の表現を、物語世界の事実を支える表現か物語世界の事実を支えない表現かを基準として、客観表現と主観表現とに大別する。

物語世界の事実を支える表現である客観表現には、地の表現と自解表現とがある。物語世界の事実を支える表現とは、物語世界を直接に、あるいは間接に構築する表現と言い換えることができる。つまり、作者が客観表現で表現する事柄は物語世界の事実となるのである。作者が客観表現で表現する事柄に対して疑いを差し挟んでは、作品の理解が成立しないことになるからである。そこで、これを、物語世界における客観的事実を認定するという観点から、客観表現とする。

地の表現は、物語世界の事実を直接に構築するものである。

自解表現は、作中人物となった作者が、自作を解説するために引用する表現であり、その観点からの仮称である。これは、作者自身のことばを作者自身が引用して、物語世界の事実を間接に構築するものである。自解表現で引用される表現は、作品の内外から自在に選ぶことができる。

この客観表現に対し、物語世界の事実を支えない表現を主観表現とする。主観表現が物語世界における事実を支えないとするのは、物語世界の事実に対する、作中人物である表現主体の認識を表現するものであるからである。というのは、物語世界内の表現主体の認識は、物語世界の事実に対する解釈の可能性のひとつにすぎないからである。したがって、会話表現の表現する事柄は、客観表現の表現する事柄によって否定されることがある。

客観表現と主観表現との事実認定における関係を整理すると、以下のようなになる。

その一、客観表現の事柄と主観表現の事柄とが一致する場合は、主観表現の事柄を物語世界の事実と断定する。

その二、客観表現の事柄と主観表現の事柄とが矛盾する場合は、主観表現の事柄を物語世界の事実でないとして断定する。

その三、客観表現の事柄と主観表現の事柄とが一致しないけれども矛盾しない場合は、主観表現の事柄を物語世界の事実と見做す。

つまり、主観表現の表現する事柄には、虚偽が含まれている可能性がたんに存在するのである。物語の登場人物は、いつでも嘘をつくことができるのである。客観表現と主観表現とを、同じ基準で扱うことができない理由の一つがここにある。表現主体の主観的認識の表出が、主観表現なのである。

ところで、三谷邦明氏⁽¹⁾は、源氏物語に、「登場人物が現在対象を見ている眼差し」を地の表現に書き込む表現方法、すなわち自由間接語法を指摘する。自由間接語法は、欧米においては、一九世紀にフロベールが完成させたものだというのであるが、「登場人物が現在対象を見ている眼差し」を地の表現に書き込むとすれば、地の表現に作中人物の主観表現が潜在することになり、ここでの客観表現の定義に矛盾しそうである。だが、作中人物の視点が、そのまま地の表現の視点になるのだとすれば、それは、作中人物の視点と作者の視点とが一致していることを意味する。とすれば、自由間接語法によって構成する地の表現は、作者の観点から物語世界の事実を支える表現と見做すことができる。つまり、自由間接語法の存在は、客観表現の定義に抵触しないのである。

主観の表現 物語世界の事実との交流の有無を基準に、主観表現を二種に分析する。物語世界の事実と交流する表現は作中人物の主観表現で、潜在的あるいは潜在的に引用形式を持つ。つまり、かぎ括弧を付すことのできる表現である。会話表現と書簡表現と独話表現と心話表現との四種がある。

会話表現、書簡表現、独話表現、心話表現、それぞれについて詳細に説明する必要はないと考えるが、一往通覧する。

会話表現は、作中人物の発話の引用表現である。これには贈答歌が含まれる。書簡表現は、作中人物の書簡の引用表現である。これには贈答歌が含まれる。よって、二者の相違は、音声言語であるか、文字言語であるかの相違である。

独話表現は作中人物の独話の引用表現である。これには独詠歌が含まれる。心話表現は、作中人物の心話すなわち内心語の引用表現である。これには独詠歌が含まれる。よって、二者の相違は、実際に発話されたか否かの相違である。

ところで、会話表現・書簡表現・独話表現・心話表現の四種は、作品の表現において、識別困難の場合がある。たとえば、会話表現と書簡表現との場合、音声による伝達か、文字による伝達か、本文から明確にしがたいことがある。また、独話表現と心話表現との場合、実際に発話されたのか、発話されなかったのか、本文によって判定することが困難な場合がある。しかし、論理的に区別のあることと実際に識別できることとは、別の次元の事柄であるから、この四項目を立てることの障碍にはなりえない。

以上が物語世界の事実と交流する表現である。これは、地の表現に包摂される形で引用される。顕在的な引用形式を持たない場合でも、地の表現が構築する物語世界に取り込まれる表現であることに違いはない。ここに、物語世界の事実と交流を認めることができる。引用表現の表現主体は作中人物であるから、物語世界の事実と交流があるのは当然であるといえよう。したがって、物語世界の事実と交流する表現の部分を作品本文から削除すると、物語の展開が断絶したり、物語世界の情報が減少したりすることがある。

ところが、間投表現は物語世界の事実と交流を持たない。これは作者の主観表現であって、顕在的にも潜在的にも引用形式を有しない。かぎ括弧を付すのが困難な表現である。作品世界の外部から投げ込まれた表現だからである。地の表現が包摂できるのは、物語世界の内部に存在するものに限られる。外部からの発言を包摂し統括する働きを、地の表現は持たない。

したがって、間投表現の部分を作品本文から削除しても、物語の展開が断絶したり、物語世界の情報が減少したりすることがない。間投表現を除く主観表現と客観表現とが、物語文脈の主流であるとすれば、間投表現は、物語文脈の傍流であるといえる。文章中に、異なる文脈から挿入される文で、その性質において、間投助詞に類似することから、間投表現と仮称する。

物語世界に対する作者の注釈といった、間投表現の性質は、自解表現と共通する。ところが、自解表現は、地の表現に包摂されることで、物語世界の事実と交流を持ちうるのに対して、間投表現は、物語世界の外から感想を述べるものであるから、物語世界の事実と交流を持つことがないのである。いわば、映画を見ながら、画面に向かって感想を言うようなもので、映画のストーリーには何らの影響を与えないのである。

なお、源氏物語の古注釈でいう草子地と、ここでいう間投表現とは必ずしも一致しないようである。源氏物語の草子地を論ずる資格も能力もないが、間投表現は、草子地に比較して、より狭い範囲の表現を指すことになるようである。それだけ、地の表現の範囲が広くなることになる。

以上で、平安時代の物語表現の体系の説明を終えて、竹取物語の表現に適用してみよう。

竹取の分類 竹取物語の表現を資料一⁽²⁾の体系にしたがって分類すると、地の表現に三一五例、自解表現に二例、会話表現に一八五例、書簡表現に一六例、独話表現に八例、心話表現に二三例、間投表現に五例を数えることができる。

地の表現の事例として、資料二に作品冒頭の二文を掲げた。

〔資料二〕竹取物語の地の表現

〈ア〉いまは昔、竹取の翁といふもの有けり。

(かぐや姫の誕生)

〈イ〉翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給べき人なめり」とて、手

にうち入れて家に持ちて来ぬ。

(かぐや姫の誕生)

地の表現について、ここで改めて説明すべきことはない。ただし、二点補足しておきたい。第一点は、資料〈エイ〉のよ
うに会話表現などを包摂する場合は、傍線を付した「翁いふやう」から」とて、手にうち入れて家に持ちて来ぬ。」までを、
一例として算出したことである。第二点は、資料〈ア〉の「竹取の翁といふ」のような呼称や固有名詞などを紹介する場
合は、形骸化した引用形式と見て、物語世界の事実を支える表現に入れたことである。

自解表現の事例全二個は、資料三に掲げた。

〔資料三〕 竹取物語の自解表現

〈ウ〉 御子の「御供にかくし給はん」とて、年頃見え給はざりけるなりけり。

(車持皇子譚)

〈エ〉 翁、今年は五十ばかりなりけれども、「物思ふには、かた時になむ老になりける」と見ゆ。

(かぐや姫の昇天)

傍線を付した部分が自解表現である。資料〈ウ〉は間接話法の事例であって、「御供にかくし給はん」は、車持皇子の意
志の表現であるが、尊敬表現「御」「給ふ」の使用が見られ、皇子自身の独話表現あるいは心話表現を直接引用するものと
することは困難である。尊敬表現は、作者の観点から使用されたものと見做すべきであろう。そこで、作者の観点からの
表現を、作者自身が引用するものとして、自解表現とする。

資料〈エ〉は、かぐや姫の告白を聞いて悲嘆に暮れる竹取翁と、これを見舞った勅使との対面の場面を構成する文段の
ひとつである。傍線を付した「物思ふには、かた時になむ老になりける」は、この時の翁の外見を表現するものである
が、誰の目に「見ゆ」即ちそう見えたのか、が問題となる。勅使の視点であるとすれば、これは勅使の心話表現となる。
しかし、私見によれば、係助詞「なむ」を用い助動詞「けり」で統括する文は、初期物語作品においては、原則として、

地の表現に用いて、会話表現・心話表現には用いないのである。⁽³⁾ 例外となる事例は、資料〈エ〉を除くと、かぐや姫が自身の素性を翁に告白する会話表現に用いられるものである。これは、かぐや姫が、自らがこの世の人間でないこと、月の都の人であることを告白するもので、非人間性を表現するための例外的使用と考える。そこで、資料〈エ〉を勅使の心話表現と見る積極的根拠を指摘しがたいので、資料〈エ〉は、作者の視点の引用表現と見做す。見る主体は、作中に登場する作者自身である。そこで、資料〈エ〉は、自解表現に分類することになる。

会話表現の事例 一八五個のうち、一例を資料四に掲げた。

〔資料四〕 竹取物語の会話表現

〈オ〉「この人々」——ある時は竹取を呼び出て——『娘を吾にたべ』と、ふし拌み、手をすりのたまへど、をのがな
さぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日すぐす。⁽⁴⁾

(貴公子達の求婚)

傍線を付した部分が会話表現となる。この句読は、塚原学説によるものである。資料〈オ〉は、竹取翁の会話表現である。書簡表現の事例一六個のうち、一例を資料五に掲げた。

〔資料五〕 竹取物語の書簡表現

〈カ〉「おく露の光をだにぞやどさましをぐら山にて何もとめけん」とて返し出だす。

(石作皇子譚)

傍線を付した部分が書簡表現である。資料〈カ〉は、石作皇子への姫の答歌である。

独話表現の事例八個のうち、一例を資料六に掲げた。

〔資料六〕 竹取物語の独話表現

〈キ〉世界の男、貴なるも賤しきも、「いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがな」と、をとに聞きめで、惑
ふ。

(貴公子達の求婚)

傍線を付した部分が独話表現である。独話表現については、先述したように、個別の表現において、心話表現との区別が明瞭でない場合がある。そこで、「思ふ」や「見る」など心話表現であることを明示する表現を伴う場合のみを心話表現として、それ以外を独話表現とする。資料〈キ〉は、求婚者達の独話表現である。

心話表現の事例二三個のうち、一例を資料七に掲げた。

〔資料七〕 竹取物語の心話表現

〈ク〉「さりととも、つゝに男あはせざらむやは」と思ひて、頼みをかけたり。

(貴公子達の求婚)

傍線を付した部分が心話表現である。資料〈ク〉は、貴公子達の心話表現である。間投表現の事例五例を資料八に列挙した。

〔資料八〕 竹取物語の間投表現

〈ケ〉——いつか聞きけん——「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上り給へり」と、のゝしりけり。(車持皇子譚)

〈コ〉宮司、候ふ人々、みな手を分ちて求めたてまつれども、——御死にもやしたまひけん——え見つけたてまつらざるなりぬ。(車持皇子譚)

〈サ〉——いかゞしけん——疾き風吹きて、世界暗がりて、舟を吹もてありく。(大伴御行譚)

〈シ〉「よき事也」とて、「楫取の御神、きこしめせ。をどなく、心おさなく龍を殺さむと思ひけり。いまより後は、毛の末一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よ事をはなちて、——起ち居、泣々よばひ給事、千度ばかり申給ふけにやあらん——やうやう神、鳴り止みぬ。(大伴御行譚)

〈ス〉国に仰せ給て、手輿つくらせ給て、にようによう担はれ給て家に入給ひぬるを、——いかで聞きけん——遣はし、男どもまいりて申やう、「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなん、殿へもえまいらざりし。玉の取りがたかりし事を

知り給へればなん、勘当あらじとてまいりつる」と申。

(大伴御行譚)

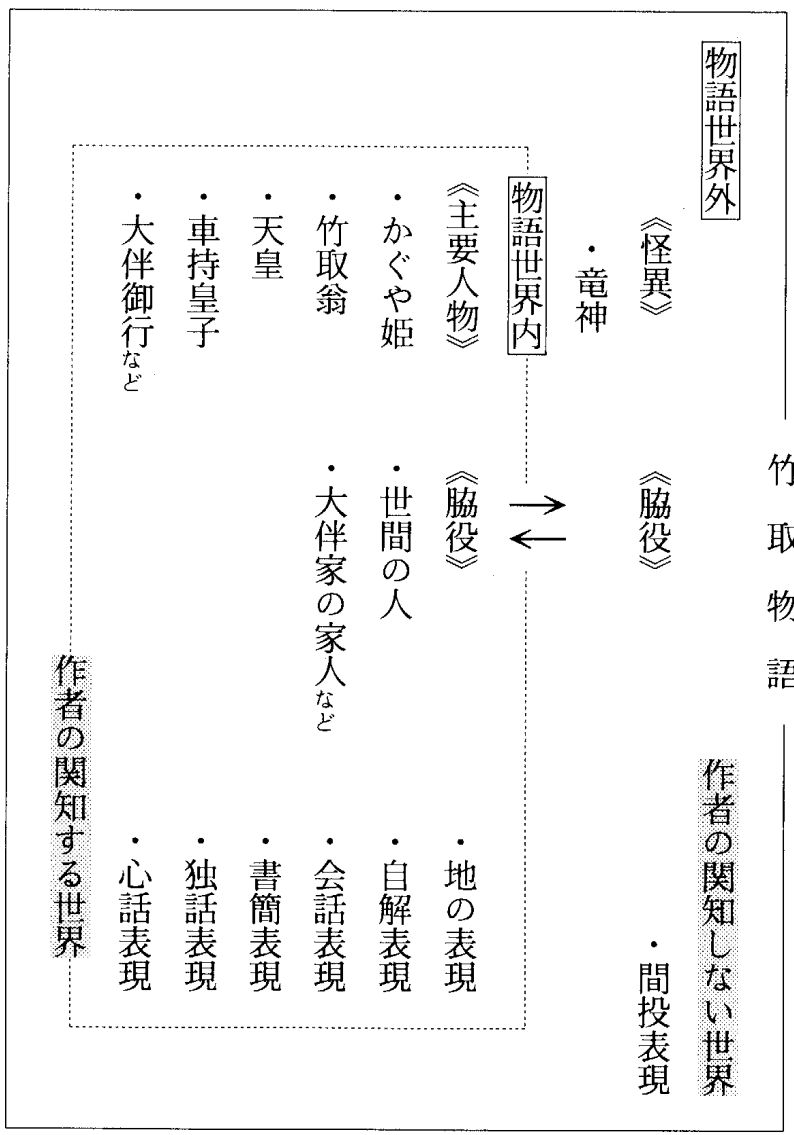
傍線を付した部分が間投表現である。資料〈ケ〉「いつか聞きけん」は、偽物の蓬萊の玉の枝を持って上京する車持皇子一行を、「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上り給へり」と大騒ぎする世間の人々に対する疑問表現である。資料〈コ〉「御死にもやしたまひけん」は、計略を暴露され、求婚に失敗して姿を消した車持皇子に対する疑問表現である。資料〈サ〉「いかゞしけん」は、「筑紫の方の海」に舟で乗り出した大伴御行一行を襲った暴風雨の原因に対する疑問表現である。資料〈シ〉「起ち居、泣々よばひ給事、千度ばかり申給ふけにやあらん」は、天候回復の原因に対する疑問表現である。資料〈ス〉「いかで聞きけん」は、主命に服従せず姿を消した家人たちの行動に対する疑問表現である。

作者の立場 ところで、間投表現から看取される物語世界に対する作者の立場には、一貫性を認めることができる。すなわち、主要人物の存在する空間以外の空間にいる脇役の言動と怪異の存在とは、作者の関知しないものとする姿勢が一貫しているのである。資料〈ケ〉は、世間の人々が車持皇子の上京をどのようにして知ったのか、疑問を表明し、それが作者の関知しないものであることを示している。資料〈ス〉は、同様に、大伴御行の帰宅を、散り散りになっていた家人たちがどうのようにして知ったのか、作者は不明であると言う。資料〈サ〉と〈シ〉とは、天候の急速な悪化と回復との原因を、不明であると作者は注釈を加える。この天候の悪化と回復との原因を、御行の乗った舟の楫取は、竜神の怒りであると主張する。だが、作者はこの主張を肯定も否定もしない。作者は、竜神の存在を関知しないのである。

そこで、資料〈コ〉は、主要人物である車持皇子の行動に対して、疑問を提示するものであるから、例外かとも思われる。しかし、資料〈コ〉の直後には、資料三の〈ウ〉の一文があり、その行動は、作者の関知するものであったことがわかる。つまり、資料〈コ〉で、作者自ら疑問を発して、その疑問に、地の表現で作者自らが答えるというかたちをとっているのである。

物語世界の、この世における怪異の存在を不定とする姿勢は、地の表現から看取できることを、かつて指摘したことがあるが、⁽⁵⁾間投表現においても認められるものである。竹取作者の物語世界に対する立場は、一点に固定されているといえる。この関係を図示したものが、資料九である。

〔資料九〕竹取作者の物語世界との位置関係



さて、以上、通覧したように、竹取物語の表現は、物語表現七種すなわち地の表現・自解表現・会話表現・書簡表現・

独話表現・心話表現・間投表現すべてを満たす。資料一に示した物語表現の体系が矛盾と脱落とのないものだとするれば、竹取物語は、物語作品の嚆矢として登場したときに、すでに物語表現を完成⁽⁶⁾させていたことになる。だとすれば、竹取物語以降の物語作品は、すべて竹取物語が完成させた枠のなかで発達したものといえよう。物語作品としての熟成は、源氏物語の出現を待たなければならぬのであるが、物語表現の基本的枠組み作りは、竹取物語で完了していたのである。竹取物語は、完成したかたちで物語表現を始発させた、と表現史の観点から位置づけられるのである。

最後に、このような物語表現の体系構築の意図するところを述べておきたい。すなわち、物語を構成する表現の種類による(国語学的)文体の相違を分析することにある。作品表現は多種の(国語学的)文体によって構成されると考えるからである。以上の考察は、そのために基礎作業である。

〔注〕

(1) 三谷邦明「源氏物語における〈語り〉の構造―〈話者〉と〈語り手〉あるいは「草子地」論批判のための序章―」(『物語文学の方法Ⅰ』一九八九年三月三〇日/有精堂)。

(2) 本文は、阪倉篤義校訂『岩波文庫/竹取物語』(一九七〇年八月一七日/岩波書店)に拠る。

(3) 長沼英二「物語文体の史的展開―試行錯誤の原理融合―」(『落窪物語の表現構成』一九九四年九月三〇日/新典社)。

(4) この句読は、塚原鉄雄『新修竹取物語別記補訂』(未刊)に従う。

(5) 長沼英二「作品構成と表現映像」(『落窪物語の表現構成』一九九四年九月三〇日/新典社)。

(6) ここでいう「完成」とは、すべての要件を備えていることを謂う。「完備」と言い換えてもよい。したがって、完成度の〈優劣〉といった価値観を含まない概念である。すなわち、要件のすべてを備えていても、文学性の高いものとは限らないし、要件の一部が不備であっても、文学性の低いものとは限らない。本稿で言及するのは、全ての要件を完備しているか否かであることを、断っておきたい。